

旅行中は体調に気をつけませう

パリ在住 五十年入学 稲 賀 繁 美

ウィーンで飲んだポーランドウオトカはほんとうにうまかった。アルコール分七十パーセント。それにアルコールをとった花のかおりがほのかに漂って、まことに熟れきった美女を抱く快よさが口いっぱいに広がり、のどをくすぐっては霧散する。ところがあとがいけなかった。良い心地で床について、さて翌朝目醒めてみると、さいふこそ空っぽにはなっていないものの、喉の痛いこと、自分の唾液さえ満足に飲み込めぬ。こうして三日間空腹をかこちつつも何も食すこと値わぬまま、高熱にうなされる日々が続くこととなった。そんな中で駄文を草し始めている。

そもそも何故ウィーン下んだりまで足を伸したかと申せば、昨年の夏期独逸長期滞在に味をしめて、今年も二匹目の仔猫ならぬなんとやらを狙ったからで、ロンドン、グラスゴーと六月下旬二週間余を「調査」に費し、途中湖沼地方での一日休暇をはさんでさらに三週間エジンバラで英語のサビを落とし、ホームステイに満喫し（というには家のガキどもを持て余したが）、再度グラスゴー大学図書館の冷凍庫で防寒服に身を固めて一週間こもり居という真夏の椿事を演じた後、ドーヴァー海峡のストにまきこまれ憔悴しきって真夜中パリに至れば、予定していたローザンヌへの列車の接続は既に無く、一夜路頭に迷いかねまじき経験を経て、とにかくローザンヌにたどりついた、そのあたりから話を始めようかと思う。

そう、しょうこりもなくローザンヌの合気道場に行ってみたのである。ミュンヘンで去年世話になったハインツ・パット氏からもらった住所をたよりに電話してみると、若々しい女性の声で、本日七時四十五分より稽古だといって詳しい場所を教えてください（御参考まで）、道場は AV. d' Echallons, 119, Lausanne, 1004, 連絡先 Mr. Jean-Marc Burnier, Tel. 32-77-32, 稽古は月木金、19:45-21:30, ところどころにミュンヘンの Heinz Patz 氏の道場は Müllerstraße, 42, 8000, München, Tel. 265887, 練習時間月水金 19:00-21:00, 火木 18:00-19:00, 日 10:30-12:00)。

ビュルニエ氏の道場は五十畳余の比較的小さな道場だが、道場生たちの元気なこと、老いも若きも去年のミュンヘンに劣らない。一日目は二ヶ月半ぶりの稽古だったものだから、最初こそ普段より体が軽いような気がして調子良くとばしたが、最後に腰投げが二十分ばかりつづいたところで、なさないことにアゴが出そうになった。お相手はちょっとこのままローザンヌを去るのが惜しくなるほどの清楚な、目の美しい、小柄だがすらりと釣合のとれた肢体をしたお嬢さんで、この子を十分ばかしつづけて投げて間こそ天国だったが、後半戦受け取り交替して、彼女のすばやく回転の早い攻勢に、ほんほん続けざまに飛んでやってくるうちに横腹は痛くなるは、目はまわるは腰はむりに伸ばしても夢遊病者の如き有様で、いやはや大学一年生の夏合宿の朝トレの馬飛び以来とんと忘れていたしごきにあった。とんだ醜態になりかねぬところだったが、相手が相手だから弱音は吐けぬ。男はつらい。

翌朝こそは何ともなかったが、案の上、二十四時間を経過する頃から足全体が硬直化してきたのは、老化現象以外の何ものでもない。三日間びっこを引くはめになった。阿呆の勲章。

とまれ稽古後さっそく道場主のビュルニエ夫妻はじめ主だった人たちと、すぐ隣りのカフェに入った。ビュルニエ夫人は先刻電話口で対応してくれた人だが、とても成年に達した二児の母親とは思えぬ、若々しい女性で、ちょっとプロのダンサーを思わせる、軽く繊細だが芯の通った、袴の似合う体に、ひきしまった顔の持

主。それだけに、大きな目が魅力的で、良く気のつく朗らかな人。道場生全体の母親役を喜んで立派に果しているのが、門下生たちとのやりとりを見ていても、おのずと感知されて、実にすがすがしかった。語尾が伸びて微妙に抑揚する、なんとなくドイツ人のフランス語みたい、おっとりした彼女の方言にも、接するにつけ、かえって親しみを覚えたが、反対に彼女は、はじめて小生の声を電話で聞いた時は、てっきりフランス人だと思ったとかで、お世辞にせよ、他にとり得とてない小生には、こそばゆくも、晴がましかった。

ビュルニエ氏はこれまたたいへんな男前で、少々頭頂が薄くなり始めてはきているものの、すばらしい体格の持ち主でほれほれする。頬の縦てじわは稽古の量と質の証しだろう。箇々の技術の小手先の違いに拘泥するのではなく——当地では分析的な学習訓練と、昇級試験の判定基準を客観的に判別可能なものにせねばならぬという権威の要請から、とかくこの傾向が行きすぎるのだが——多々の技に共通する本質的な態度と姿勢の体得に力点を置いて、変化技を広げてゆくという指導方針も気に入った。それにしても、こういう腕っぷしの太い筋金入りに、合気は力じゃないなどと論されていると、胃下垂気味のヤワで体格劣性いかんともしがたい日本人インテリ(?)の典型たる小生などは、ほとほと絶望的になるのだが、きびしい稽古の後にはほんとうに近づきやすく、親身で、気のおけぬこのマルクには、すっかりやかいかになった。

週末は稽古の後、山の上の行きつけのイタリア料理店に皆といっしょに招かれもしたが(見おろすレマン湖の夜景もいささかタイクツだが悪くない)、夫妻の日本旅行の思い出に花が咲いて、店の看板まで、あっという間に時間がすぎた(うまい料理に地酒のロゼがまわり、調子にのって店のボーイさんとイタリア語しゃべりはじめてまわりの仲間を少々啞然とさせて得意にもなった)。夫妻曰く、ヒメジ城(字失念)の掃除のおばさんたちの衣装がおもしろかったの、奈良で私鉄と国鉄を混同してとんでもないところへ行ってしまったの、京都の一方通行がわけわからず車を運転しているうちにすっかり方角を失ってしまったの、同じ京都の純日本風の小さな黒い旅館に最初こそすっかり面喰ったものの、今にしてみると何ともなつかしくてしょうがない、等々。就中日本式のお風呂にはご満悦の様子であった。至誠館にも一度いらしたらしいけれど、折り悪しく、四月の新年度はじめて休館だったそうだ。

＊

ローザンヌには三週間滞在したのみ。この美女ぞろいの道場を、このまま一人の女の子にも手を出さずに、住所を尋ねることもままならぬままに、去ることの何と無念だったことか(同輩諸氏よ、既にヨメサンは見つかったかね? わしや、あかんわ)。それでも、各地で作った友人を尋ねつつ、ウィーンに至る途中、再度ミューンヘンのハインツのところで一晩稽古をし、旧交を温め、あま

つさえ道場にタダでとめてもらった（寝具がなくて少々寒かったが、とにかくミュンヘンという街は小生最高に気に入るのであります）。

ジーマンスと富士通の提携のプロジェクトに関与して、三年ほど日本に居たという、すばらしい体に、あくの強い顔をした、おそろしく合気のうまい——とりわけ受け身の軽さたるや、筋肉のかたまりであるだけに、よけい信じられぬ——純朴そうでかつ、ゆかいな皮肉屋で女の子を巻き込む世故にもたけたおじさんが、たまたま来ていて、相手になってくれ、小生のおとろえきったドイツ語能力でも、稽古のあとの例のクナイペでのビールの席でのおしゃべりが、ことの他楽しかった。

スコットランドで知り合った、フランス語も、英語もペラペラの、ザルツブルクに住んでるおねえさんに、通りすがり電話してモツアルトの生家のすぐそばのコンディトライでランデ・ヴとつたら、なんと娘二人つれて現われて、その有様に面喰ったというよりは、処女と、二児の母との区別もつかぬ自分の女性認知能力に深い絶望をおぼえつつも、にわかじこみのおじさんを氣取って母子三人といっしょに、観光客など来ない、お城のわきの霧深い山道を愉快に散歩してまわったりした後に、さてウイーンに着いたれば、関肇大先輩にひさびさにお会いして、うまい汁でもすおうなぞという魂胆が災いしたのか、その心がけの悪さゆえに、ウイーンでは最初から苦勞した。カゼでもひかめと皮肉の言えぬ人

というのも世の中にはいらっしやるらしいが、小生の場合、ふだんの非文学青年（おじんとかジムサイという世辞はタナアゲにしてお下さい、それでもウイーン大学のドイツ語講座の教師にあたってすごい美女には、あなた二十七才うそでしょう、二十才だと思ったといわれたのであって、——残念ながら既にフィアンセありといえども、これだけ知的で（茶目っ気あってスカトロロジーを愛し）、これだけ気が効いていながらアンニュイで、これだけすらりとした肉体に、机にはおづえつくと襟元からこぼれてしまうほどの不釣合に大きな乳房（ちぶさと読んで下さい、ニューボーではありません）を装備した女性にはお目にかかったことがない。いっしょにワルツも踊ったけれどすばらしかった：イカン脱線しすぎた）とはうって変って、妙な本歌どりも、こうして一日中ウイーンのとある学生寮にこもって煩悶するうちに、ひねれたのであります。旅に病んで夢かけめぐる枯野なし。当たり前だよ、ウイーン市内だもの（ついでながら大学休暇中ウイーンに滞在される方には、是非ともこの種の学生寮——全部で十ぐらいはある——をお勧めします、一泊約百シリング——千五百円で可能）。

で、急性インフルエンザもおさまたところで、ウイーンの日本大使館に関肇先輩を尋ねたのであります。じゃないや、最初はシュターツ・オーパーの前で昼に待ちあわせて、昼から酒のみすぎたのだった。二度目がそうこうして、郊外のお宅にうかがって（だいたい散文的になってきた）、美しいけど三人三様（上から情・意

・知とでもしようか）のお嬢さんたちにお会いして、快活で典型的な日本美人と申し上げるべき夫人にもはじめてお目にかかり、娘どもにちんぽがどうしたといった類の教訓をたれているうちに酒と仕事の疲れでコックリはじめた先輩を尻目に、この日本美女にヴァインチックの屋外ヴァインレストランに遊びに連れていってもらったものの、不覚にもこっちも酒の飲みすぎで、思うにまかせず、しあわせも中くらいなりおらが秋のあと、次の日曜だけは、お宅の近くで新ワイン（ホイリゲ）を飲む、バンドつきのガーデンがあるとかでまねかれて、午後二時から始めて、都合三軒ハシゴして（夫人は子供たちつれて、Fiedermans を見に行かれたので以後不在）、なんと午前二時まで、飲み込んだのであります。さすがの関先輩も齢五十に達してフラフラしてらっしゃったけど、これには参りました。ダダで飲み放題、かしづけるシロウト嬢も二人居で、小生のドイツ語も一応ボロを出さなかったし、楽しかった（フレーダーマオスのつづりまちがえたら後輩諸氏の校正時における知的程度を疑問視するから御注意あれ）。もつべきものは先輩です。

三度目の正直で大使館へ行くと、例によって皆様暇そうだったけど持場を離れられぬというなかで、関先輩は小生の貧相というより、乞食同然の身なりを気になさってか、大量の衣類を放出されたのであります。奥方は少々しぶっていらした様子ですが、もう年であわぬのか流行おくれだから要らぬのか、革ジャンからは

じまって、さすがに上下のそろいはおことわりしましたけど、とにかく先輩の方が体がひとまわり（枯れてきたとは言え）大きいのでから困ります。全てあつめて、さてトランクにつめようにも重くて重くて、重量制限（フランスへの持ち込みは三十キロ）にひっかからぬか、気が気ではありませんでした——去年はミュンヘン駅頭での荷物のかえで、ひどい目に会ったもんね。

そのあとウイーンの合気道場につれてってもらったのです。命ナリケリ維納ノ夕暮。

さてさて、これが私立のトレーニング設備を週一回借りているという代物で、第一印象からして、アレ？。ようやく三段もったボテボテのおじさんが居るだけで、めずらしくヘア関訪問とあれば、指導は関さん。たしかに技はすばらしいのだけど、ちょっと人前でやるとカッコがつかず、関先輩特有のはにかみもあって互いに礼のかっこがいけるし、だいいちドイツ語がご愛敬だけどこれではちょっと恥かしい（弁明のために書いておきますが、トツ弁の関さんが、それでも英語になるとなかなか達人なものには意外なほどで、はなはだ感心しました）。三段氏（名前失念）も、受けはわりと良くとるけど、技は甘いし、腕力はあるけど稽古不足で太りすぎだし、まじめな人だが道場を背負うには小心にすぎます。他の連中は言うもさらなり——小生もわきの甘さとか、肩にどうしても力の入ってしまうこと、それから箇々の技術のいいかげんさを関先輩から指摘されて、なるほどとは思ったのですが——

人数は少ないし、途中でクシの齒が抜けるみたいに新入りの男の子、女の子が帰っちゃうし、場所は狭く天井は低く陰湿で、ボクシングのサンド・バッグがぶらさがっているのもじゃまだし、はなはだ失望。若い日本人の学生が別のところで教え始めて、権威づけのために二ヶ月ほど日本に戻って二段もらったという話に聞さんはずいぶんフンガイされてたけど、こんなにひどいんじゃない、運動神経零のオレでも教師がつとまりそう。

おまけに、こういう施設の妙なところで、更衣室は女の子もいっしょで、目の毒だし、なぜか鏡張りのトレイニング場（ウェイト・トレイニングもあれば美容体操みたいのも同居してる）のすぐ横に三面鏡なぞずっとあって、女の子たちというよりむしろ男の子たちがそこに座っておめかししてる。女子用トレイニングのパンフレットなんて、下手なポルノよりよっぽど扇情的で、まともに見てられるものではなく、果してこれが女性解放なのか、完全にその逆なのか、純心（!?）な小生は、はなはだ懊悩したのであります（ついでながら、前述の女教師はトイレから出てきては喜々として落書の報告をするのが常でしたがその中に八女はかしこいより美しい方が良いのは何故か。答。男は考えず視るだけだからVとあったそうな）。きわめつきはサウナで、生まれてはじめて入って、暑くて、鼻の穴がヒリヒリするので、参ったなりにはおもしろかったものの、どうにも腑に落ちぬのは、実際問題としては何も発生しなかったけど、これが男女別ではない様子で

あること。

異和感のはなはだしいわけで、聞くところによると、もうすぐ東海大学が金出した専用道場が落成するのだそうで、それで少しはマシになるだろうとは関先輩の言葉ですが、問題は先生の居ないことで、——関さん自身でがんばってやるなんておっしゃってたけど、他には日本人としては六十五才のカチカチのおじいちゃん、この小生より下手そうな若輩学生しか居ないととなると、関先輩の言ではないけれど、ちょっと見てられない、傍観しては居られないというのは、わかるような気がします。イヤハヤ。

ウィーンを去る前に、ついでに、とブダペストまで行ってみた。ホームステイのすばらしいこと。あいにく七十才のとてもそんな年には見えぬ元外国大使館づとめのおばあさんと、その愛らしい孫娘にしか出会わなかったけど、人々の親切で、いろいろむつかしいことはさておいて明るいいこと、とても東欧とは思えない。物価は安く、町はあくまで美しく、料理はうまく、行かぬ手はない。その後、友人の女の子たちをたよって、ニュルンベルク、ヴェルツブルク、フランクフルト、ケルン（おもしろい）、リエージュ、リュクセンブルクと経て十月一日パリに戻った。人生最後の旅だったかも知れぬが、後輩諸君にも推めたい。でも旅行中はくれぐれも健康に留意しませう。これ本音デス。

一九八四年十月二十日